

「こんなに重い病気や障がいがあっても、地域の中で暮らしたい」。これが、当初から掲げてきた小さなたねの理念です。しかし、理想を描いて追い求めても、思うような形やスピードでなかなか進まない状況ではあります。これからも「地域の中での暮らし」を大切に、今できる取り組み



今年も「春、が来ましたね。

「ム」や「〇〇園」といったカテゴリーズされた集団では、社会の中での「個人」は全く見えなくなり、関係性も乏しくなってしまう。そうではなく、「〇〇さん」として生きていくためには、「住まい方」は非常に大切です。そうした「住まい方」の具体的な提案を始めます。

これからの小さなたねは、地域生活における「ケア」と「応援」をします。

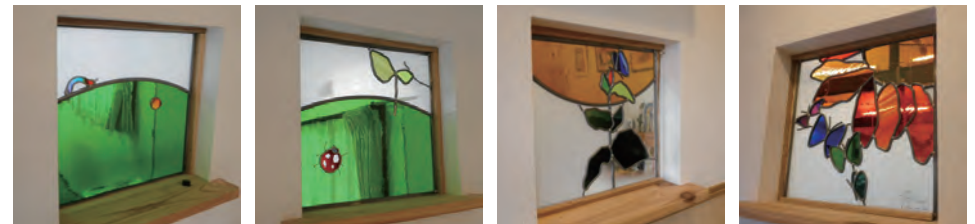
地域生活ケアセンター小さなたねは、2011年4月の開所から8年となりました。当時まだ小さかった子どもたちの成長した姿は、その月日の経過を感じさせてくれます。また、今年2月には、このさかクリニックの横に新拠点が生じ、新生たねとして歩み始めています。そして、5月からはこれまでの場所（梅林）を「地域生活応援たねプラス」として、主に成人期（18歳以上）の方たちの活動を展開することになっています。

みから始めていきたいと考えています。コンセプトは「はたらき」と「住まい」です。障がいの重さゆえ、常に庇護や養護の対象とだけ見られやすい彼（女）たちです。でも、そうした彼（女）たちだからこそ、唯一無二の「はたらき」があるはず。その「はたらき」に対する評価と対価の仕組みをつくることによって、人としての生きがい、を生み出すことに繋がると考えています。

また、「住まい」に於いても、いわゆる「〇〇ホーム」や「〇〇園」といったカテゴリーズされた集団では、社会の中での「個人」は全く見えなくなり、関係性も乏しくなってしまう。そうではなく、「〇〇さん」として生きていくためには、「住まい方」は非常に大切です。そうした「住まい方」の具体的な提案を始めます。

## 地域生活の「ケア」と「応援」

所長 水野 英尚



小さなたねの物語が描かれたスタンドグラス（ガラスアート TAKAMI 製作・寄贈）

### たねスタッフのつぶやき

昨年9月より小さなたねで働くようになり、半年がたちました。試用期間終了です。ご利用者様ご家族にもまだ全員にはお会いできていないかと思っています。

昨年3月までは病院勤めで、耳鼻科とNICUに勤めていました。前勤務先で関わった方達もいて、お家での様子を感じる事ができる今の環境に新鮮さを感じています。これからもご利用者様と共にたねで過ごす時間を楽しみにしています。

どうぞよろしくお願ひします。

中村 祐子（看護師）



医療法人にのさかクリニック  
地域生活ケアセンター 小さなたね

〒814-0172 福岡市早良区野芥4-19-31  
電話 092-834-8090 FAX 092-834-8091  
E-mail: chisanatane@tune.ocn.ne.jp  
ホームページ: http://chiisanatane.com

**後記**

大好きな姑が亡くなった。余命宣告から入院までの半年、親しい人に会い、身辺整理をしながら、興味ある本を買い、習い事を続け、選挙演説を聴きに行くなど、一人での暮らしを変わらぬペースで全うした。風邪っぽさを「風邪ではなく、がんの悪化」と告げる医師に、「避けられない大事に対して、たとえ短い余生でも恐れおののいて暮らしたくない。『風邪かな、寝不足かな』と単純化して軽やかに生きたい」と思いを伝えていた。「こうなってもいつものようにしか生きられないんです」と。いつもを大事に生きた人だった。(E)

## 自立の対極は孤立

1980年代、学校に行けなくなつて次第に社会との接点避けるようになり、自宅の自室からも出なくなる「ひきこもり」の子どもの増加がクローズアップされました。そして、今日では「8050問題」という、当時10〜20代だった若者が30年の時を経て40〜50代となり、その親が70〜80代となつても長期間ひきこもっている状態が続くような、親子の孤立化が深刻な課題だと言われます。

当時の社会常識は、学校や企業も画一化され、人と違うこと、は、いけないことだと教えられてきたように思います。子どもたちは息苦しさを感じ、常識、というルールから一度でも外れてしまえば、学歴重視、履歴書社会の中では安定した職業に就くことはできないのだと、若者たちに見えない重圧がのしかかっていたように思います。

子どもたちが親元を離れ、自立して行くということは、自分で収入を稼ぎ生計を成り立たせることであり、自分の住まいを確保し、社会人として世の中に参与して行くこと

を、自立とすることが多いようです。しかし、自立の「自」を、自分（＝個人）と捉えることで、一人で出来ることや達成して行くことを、自立の姿だとすれば、自立の先には孤立があるのではないのでしょうか。私たちの暮らしを成り立たせて行く上で、どれだけのことを自分だけで出来ていると言えるのでしょうか。毎日の食物、着ている服から、暮らしの中の至る所に、私たちはその名前さえ知らない人たちの働きにより、日常の生活を成り立たせていると言えます。つまり、「自分で」と言ったときのそれは、いかに多くの関係性の上に成り立った自立であるのかを感じ取るのが大切です。

つまり、本来の自立とは、一人で立つことでもなければ、自分だけが立つことでもありません。繰り返しますが、社会は様々な関係性によって成立しているものであり、一人の自立を考えることは、繋がりのある、あの人やこの人の自立と深く関係していることになります。もし、「彼は自立できないら」と揶揄してしまえば、私と彼は何の関係も無いと言っていることと同じです。そうした、「自立できない」とするその対象は、繋がりが絶

2018年8月から介護スタッフとして加わりました。この文章を書いている時点で、8ヶ月が経ちましたが、まだまだ不慣れなことが多いです。

以前も障がい福祉に携わってはいたのですが、小さなたねに勤めだした当初、目の前にいる利用者さんたちと「どう関わっていけばいいのだろうか」と、傍らに正座して茫然としていたことをまだまだ新鮮に覚えています。また、新しい職場で、他職種の方々と一緒に働くのも初めてでしたので、その緊張も加わり、なかなか自分なりの関わりを見つけないと感じる日々でした。

そのような中、転機が訪れたのは、勤めだして2ヶ月が経った頃でした。その日は子どもさんが多く、子ども向けの歌がよく流れていました。その日、ある利用者さん(Aさん)の傍らで、相変わらずまだどうしていいかわからない状態でしたが、とりあえずその流れている歌を口ずさんでいました。Aさんは、スタッフの声掛けに時々笑うこともある、というような印象で、自分もどうにか笑ってもらえないかなあと思って、小声でその歌の適当な替え歌を考えて歌ったところ、Aさんが笑ったのです。そのとき、傍にいたスタッフから、「Aさん、清山さんの声を覚えたいですね」と言ってもらい、そこから何か掴んだような気になりました。その日から今日まで、この路線でなんとかかんとか居させてもらっている気がします。

ちなみに、その替え歌とは、「ロールパンナは、メロンパンナの、おねえちゃん♪」→「ドキーンちゃんと、しょくぱんまんが、いい感じ〜♪」でした……。

何卒よろしく願いいたします。



そこで笑ったのかは……？



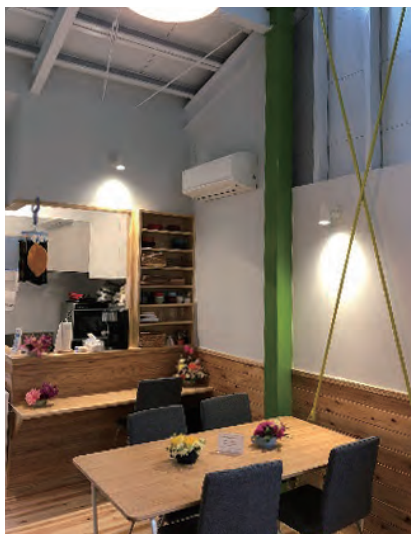
清山 浩司（介護スタッフ）

## 小さなたねの新拠点！

2019年2月、地域生活ケアセンター  
小さなたねは「にのさかクリニック横」  
(野芥)へ移転しました。

☆

これに伴い、「たねカフェ」のランチ  
は「みんなのキッチン」に引き継がれ、  
毎週水曜(第3水曜除く)・金曜にランチ  
提供を行っています(要予約)。



どうぞ一緒に  
育ててください



野芥のたねと梅林のたね、  
どちらもあたたかな空間で  
す。お近くにお越しの際は、  
ぜひお寄りください。



## “地域生活応援たねプラス”がスタートします

5月より、これまでの梅林の場所を再始動いたします。  
こちらは主に成人期(18歳以上)の方たちが過ごせる空間  
として活用します。

そして「たねカフェ」は、ランチ調理を「みんなのキッ  
チン」へ譲り、ゆったりとコーヒーが楽しめるカフェとし  
てリニューアルオープン! この場所が、青年たちの「は  
たらき、の場となることも計画中です。

今後は、彼(女)たちの地域生活を応援し、新しい彩り  
を「プラス、していくことを目指します。





渡邊 琢著  
(青土社/2200円+税)

『障害者の傷、介助者の痛み』

「日本自立生活センター」や「ピープルファースト京都」で、障がい当事者の「自立」を介助者として、コーディネーターとしてサポートし続けている著者は、当事者の「傷」は時として暴力的言動や感情の爆発が起こる、それを受けとめる介助者たちの「痛み」という、双方が顧みられなければならないという。

『なぜ人と人は支え合うのか』

「障害」から考える

映画化もされ話題となった『こんな夜更けにバナナかよ』の出版から15年。「人が人を支え合う」という社会の根幹に関わるテーマを、障がいのある人の暮らしから、見えてくるものとして描かれています。



渡辺 一史著  
(ちくまプリマー新書/880円+税)

たれ「孤立」した状態であることが多いのです。ですから「自立」を支援するといながら、結果的に「孤立」を生み出してしまっているにならないか注意が必要です。

小さなたねを利用して育っている青年たちは、その障がいの重さゆえに、「自立」などと考える機会是非常に少なく、家族や支援者にとってもそうしたこと話をすることすら無いように思います。しかし、「孤立」をさせない取り組みが、「自立」に繋がることであり、さらにそれは個人の「自立」のことだけではなく、そこに繋がる一人一人の「自立」に関連していることとするなら、彼(女)たちの「自立」は非常に重要なテーマであり、社会の中で生きづらさを抱えている人たちの処方箋になるかもしれません。

障がいのある子を持つ親たちの多くは、常に「親なき後」という課題を抱えて過酷にしていることであろう。時として、それは受け入れてくれる「施設」が、親代わりとなり、ケアをしてくれ、そうした「場所」があれば解決とされます。しかし、それでは「ケアする主体」が代わっただけで、「人が生きる」という根本的な課題には、目を背け続けたままであると私は思います。

私たちは誰も「孤立」しない社会を目指し、私もあの人やこの人、この子の「自立」を受けとめ、繋がり合えることを喜ぶことが、障がいや病があっても無くても、年老いて衰えても、あなたはここで生きていいのであり、あなたの存在が私を確かなものにしていくというような、相互扶助の関係を築く働きこそ、これからの時代に必要とされます。小さなたねの彼(女)たちと共に歩み出したいのです。



ぶらりとお花見に出かけました。